

Title	序言
Author(s)	高橋, 義文
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3 : 3-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5100
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

序言

聖学院大学総合研究所長 高橋義文

本別冊は、二〇一三年六月一四日に開催された、国際シンポジウム「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」(以下、「シンポジウム」)の報告とこの企画に合わせて三つの大学でなされた講演を収録したものである。

「シンポジウム」は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究B)による研究「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」(二〇一一―二〇一三年、課題番号二三三二〇〇二五、研究代表者 高橋義文)の一環として、聖学院大学総合研究所の主催により開催された。

この研究は、二〇世紀アメリカの代表的な神学者であり政治思想家でもあったラインホルド・ニーバー(一八九二―一九七二)の思想の特質を共同研究によって明らかにすることである。

近年、欧米とりわけアメリカでは、ニーバー研究が盛んに行われ、ほとんど毎年のように、神学、政治学、歴史学等多様な分野から、良質な研究書が出され、その状況は、「ニーバー・リバイバル」とも呼ばれるほどである。

それに対し、わが国では、ニーバーの名は比較的早く知られ、翻訳もある程度なされ、特に一九八〇年代以降相当の研究がなされてきたが、それにもかかわらず、その思想は今も十分に明らかになっていないとは言い難い。その不十分な状況は、しばしばニーバーと並び称される同時代の思想家、たとえば、カール・バルト、エーミル・ブルナー、パウル・ティリツヒといった人々の場合と比べてみると、翻訳の量においても思想研究の活発さにおいても明らかである。あえて言えば、ニーバー研究は、わが国では「遅れている分野」とでもいうべき状態にある。われわれの研究は、そうした状況をいくらかでも改善し、ニーバー研究を一步前進させることを目指すものであり、「シンポジウム」はその大きな作業の一つと位置づけられるものである。

「シンポジウム」には、海外から二人の講師を迎えることができた。一人は、ロビン・W・ラヴィン教授（アメリカサザン・メソジスト大学）であり、一人は、イム・ソンビン（任成彬）教授（韓国長老会神学大学校）である。ラヴィン教授は、特にキリスト教現実主義についての研究でつとに知られている円熟したニーバー研究者であり。イム教授は、キリスト教と文化の問題と思想的にも実践的にも積極的に取り組んでいる気鋭の社会倫理学者である。

本書は二部に分かれる。第一部は、「シンポジウム」におけるラヴィン、イム両教授の講演とそれぞれに対してなされた四名の教授によるレスポンスである。第二部は、この「シンポジウム」のために来られたラヴィン教授による三大学でなされた講演である。前者は、レスポンスの後、それぞれ討議があり、その内容はきわめて興味深く重要なものもあつたが、編集・出版の時間の都合で割愛せざ

るを得なかった。

ラヴィン教授の「シンポジウム」および各大学での講演は、いずれも教授が特に関心を持って研究をしてきたラインホールド・ニーバーとキリスト教現実主義をめぐる議論であった。結果として、本書は、おそらく、ニーバーとキリスト教現実主義に関するラヴィン教授の最も新しいまとまった論文集と言ってもよいものである。イム教授の講演は、教授が構想しつつある社会倫理のプログラムの表明であったが、それは、間接的ながら、ニーバー的現実主義への評価と批判を伴うものであり、ラヴィン教授の主張との微妙な関係を含蓄するものであった。

ニーバーとニーバーを含む社会倫理思想に造詣の深い、西谷幸介青山学院大学教授、千葉眞国際基督教大学教授、東方敬信青山学院大学名誉教授、藤原淳賀聖学院大学教授の四名の日本人研究者によるレスポンスは、それぞれ、講演に対する明確な評価と批判、問題の広がりへの指摘を含む、興味深いものである。

第二部には、「シンポジウム」開催を機に、ラヴィン教授によってなされた三つの講演、「アメリカにおける教会と国家」（国際基督教大学、六月一二日）、「ラインホールド・ニーバーとキリスト教現実主義」（東京神学大学、六月一三日）、「キリスト教現実主義と新しい現実」（聖学院大学、六月一日）を収録した。三つの講演はいずれも公開され、学部・大学院の学生と教員に加え一般からも出席があり、充実した時となった。なお、国際基督教大学および東京神学大学での講演の主題は、それぞれの大学の要望にラヴィン教授が応えたものである。

最後に、ラヴィン、イム両教授はじめ、レスポンスを担当してくださった四名の先生方、卓越した

通訳で「シンポジウム」のスムーズな進行を助けてくださった聖学院大学の藤原淳賀、ブライアン・バード両先生、このために快適な大会議室を提供してくださった青山学院大学、そのほか「シンポジウム」でご奉仕してくださった多くの方々に、シンポジウムの企画責任者として心からの感謝を申し上げます。また、国際基督教大学教授千葉眞先生と東京神学大学学長芳賀力先生には、ラヴィン教授の講演のために懇切なご高配をいただいた。特に感謝の意を表したい。

※科学研究補助金による研究は、以下の三つの分野でなされた。一つは、年数回開催してきた研究会である。三年間で一二回の研究会がなされた。二つは、ニーバーの雑誌論文・序文・論説等（二七〇〇編ほど）の収集とそのデジタル化である。約六割ほどをデジタル化することができ、「フエア・ユース」の範囲で研究者に公開されている。三つは、ニーバーの未翻訳の著書の翻訳である。ニーバーの名著『人間の本性と運命』の第二巻『人間の運命』の翻訳を四名のメンバーで手掛けている。来年度には出版できよう準備を進めているところである。